

市民文教委員会調査視察報告書

令和8年5月

日 程	令和8年5月18日（月）～20日（水）
視察先 及び 調査事項	『あんきに行ける学校プロジェクト美濃』について 岐阜県美濃市(18日午後1時30分～3時)
	第2次小牧市学校教育ICT推進計画について 愛知県小牧市(19日午前10時～11時30分)
	不登校児童生徒の支援体制について 長野県長野市(20日午前10時～11時30分)
参加委員	谷川 眞司（委員長）、仲井 玲子（副委員長） 伊田 悦子、上羽 和幸、眞下 隆史、水嶋 一明

調 査 概 要

【岐阜県美濃市】

〈視察に至る背景と目的〉

舞鶴市では、令和6年度の中学生の不登校出現率が全国平均値より高い状況にあるため、不登校となり様々な体験ができる学びの場が奪われることがないように教育環境の整備に努めていく必要がある。

美濃市では、医師や教職者、スクールカウンセラー等が連携して、相談や報告を行うことによる不登校児童生徒に対する支援に加え、事前に不登校などを起きにくくする学校づくりを行う事業「あんきに行ける学校プロジェクト美濃」を実施している。本事業の中で、スクールカウンセラーの派遣日数の拡充により子ども達に気軽に接する時間を増やしたり、カウンセリングを受けやすくするための体験やSOSをどのように出したらよいかについての授業を実施している。また、オンライン支援チームを作成し、医師や教職員、スクールカウンセラー等をメンバーとしてカウンセリングを受けた児童やその保護者と繋がることにより不登校のきっかけとなる要因を早い段階で把握することで未然に不登校を防止することにつなげている。

このような先進的な取組や事業を視察することにより、舞鶴市における児童生徒の不登校への対応の手がかりとするとともに、未然に防止する対策としても参考とする。

〈対応いただいた方〉

美濃市議会 事務局長

美濃市教育委員会教育振興課 課長、係長

〈調査事項に関する説明の概要〉

〔視察項目〕

- 専門医による児童・生徒の相談、教職員への研修について
- スクールカウンセラーの派遣日数の増加による定期的なカウンセリングによる不登校等の早期発見や未然防止について
- 医師と教職員及びスクールカウンセラー、校外教育支援センター指導員などをメンバーとするオンライン不登校支援チームの作成について

〔概要〕〈岐阜県美濃市〉

▽ 人口と世帯数等（令和8年4月現在）

- (1) 人 口：18,638人
- (2) 世帯数：7,637世帯
- (3) 面 積：117km²

〔内容〕

美濃市においても令和元年度から不登校児童生徒の数が増加し続けている。この状況を改善するため専門的な知見のある方(医師)からの見立てが欠かせないことから、「あんきにいける学校プロジェクト美濃」を開始した。

■「あんきにいける学校プロジェクト美濃」に至った経緯

現状として美濃市では小学校5校と中学校2校の計7校あるが、1校を除き校内支援センターを設置している。

令和5年度から「ここから始める未来の学校プロジェクト美濃」を開始し、学校の当たり前を見直すことを合言葉に、学校での行事や授業、教育目標を見直した。

内容としては不登校対策として学校と医師、スクールカウンセラー(SC)の3者が連携して取り組むことや 学校選択制の導入、2学期制も選択できる学期制、中学校の制服の選択性、中学校部活動の廃止・地域クラブへの完全移行などを実施した。

■「あんきに行ける学校プロジェクト美濃」の事業内容について

令和6年度から市内全小中学校に対し、SCを派遣し、相談業務の拡充を図っている。教職員対象としての研修事業で、各学校の取組状況を把握するとともに小中学校の接続を円滑に進めることができるようにするために医師と学校によるリモート定例会を実施した。

相談事業として、教職員、医師、SC、教育委員会との間で不登校支援チーム(Microsoft Teams)を作成し、いつでも情報共有・事例検討ができる体制を整備した。

保護者を対象として医師との相談会やメールによる医師とのホットラインの構築も行った。

SCの勤務回数を年50回ほどに拡充した。また、SCが授業参観や休み時間の見届けの実施、カウンセリング体験、SOSの出し方授業などを実施している。

学校ごとに不登校対策チーム(教職員・医師・SC・教育委員会)を作成し、個別の情報共有や事例相談を実施する体制を整備している。このチームでは、学校生活に困りごとを抱えている子(遅刻が多いなど)についても情報共有を行っており、不登校のきっかけとなる要因を早期に把握・専門的な知識をもとに支援する体制を敷いている。

〈委員の所感〉

- ・美濃市では、令和5年度より不登校対策として「あんきに行ける学校プロジェクト美濃」を開始している。

「あんき」とは、「安心して」「気楽に」という意味を持ち、子どもたちが安心して学校生活を送れる環境づくりを目的としている。

- ・本事業の特徴は、学校・医師・スクールカウンセラー・市教委が連携しながら支援を行う体制を構築している点である。学校では、教職員、医師、スクールカウンセラーが相談に応じ、子どもや保護者だけでなく、教職員自身も相談できる仕組みを整備していた。

また、教職員が一人で抱え込まず、専門職と連携できる環境づくりは、学校現場の負担軽減にもつながっていると感じた。

- ・学校選択制の導入

令和6年度からは学校選択制を導入している。

原則として住所に基づく学校へ通学する制度を維持しつつ、市内であればどの学校も選択できる仕組みを導入している。

これは、子ども一人ひとりに合った教育環境を選択できるようにすることで、不登校や学校不適應への対応を柔軟に行うことを目的としている。

「学校を変える」という選択肢を持つことで、子どもや保護者の精神的負担軽減にもつながる取組であると感じた。

- ・学期制の柔軟化

令和7年度からは学期制の柔軟化を進めている。

学校管理規則において、「3学期制を基本」としながらも、学校からの申請に基づき2学期制も可能とする制度を整備している。

本年度は、小学校5校：2学期制・中学校2校：3学期制という運用が行われていた。

各学校の実情や教育方針に応じて制度を選択できる柔軟性を持たせている点は、学校現場の自主性を尊重した先進的な取組である。

- ・中学校制服の多様化

令和5年度から、中学校制服の見直しを実施している。

従来の詰襟学生服やセーラー服に加え、ブレザー型標準服、それに準ずる市販服を含めた複数の選択肢から、子ども自身が選択できる制度としている。

また、衣替え期間を設けず、体調や気候に応じて生徒自身が服装を判断できるようにしている。これは、多様性への配慮や、子どもの自己決定を尊重する考え方が反映された取組であり、時代に即した柔軟な学校運営であると感じた。



- ・中学校部活動の廃止と地域クラブへの完全移行
令和6年秋からは、中学校部活動を平日・休日ともに完全廃止し、地域クラブへ全面移行する方針を打ち出している。
学校教育と地域活動を分離しながらも、地域全体で子どもを育てる考え方が強く感じられた。
- ・「あんきに」という言葉の意味が説明していただくことで理解できた。市内の学校であればどの学校に通ってもいい、服装の自由もある程度認められる、これまでの学校制度に縛られない、枠を作らないことで、児童生徒の自由な選択権を担保し、子どもたちは押し付けられ感や窮屈さから一定程度解放されている。
- ・また、これまで学校の中で先生が指導しにくいと感じていた子を「困った子」としてみるのではなく「困っている子」として医師が本人の特性や病気、障害などを早期発見、早期対応することで、教職員の不登校に対する考え方が改まったと伺い、先入観なく冷静にありのままの姿を見ることの大切さを感じた。学校とスクールカウンセラーさんと専門医が一緒に対応する体制を作られることで、保護者が安心して相談できる環境が整えられている。安心して不登校になれる、という誤解を招きそうな言葉ではあるが、個人の適性を考えてもらえる、学側を主体に考えてもらえる体制に共感を覚えた。
- ・美濃市が不登校対策事業として実施されている、教育医療連携の枠組みに、スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーを位置づけられ、学校と医療、心理の専門家が連携しながら、不登校児童生徒に対する支援に加え、不登校の起きにくい学校づくりを進めていく仕組みについて、大変参考になった。
- ・そのような仕組みは不登校児童生徒や保護者、加えて教職員の心理的安定につながるものと感じた。
- ・「あんきに行ける学校」子どもたちにとって、心配のない、気軽にのんびりできる学校は理想であると思う。そんな学校であっていいものである。
- ・美濃市では、学校の当たり前を見直す「ここから始める未来の学校プロジェクト美濃」に取り組んでおり、今までやってきたことが、本当に子どもたちにとって良かったのかを考えている。その視点が重要であると認識した。また、それを実践しているところが素晴らしいと感じた。
- ・学校と医師、スクールカウンセラーの3者が連携して不登校対策に取り組んでいる。特に、専門医による児童生徒の相談や、教師への研修や連携は、他市にはない取組である。地元出身で、医師学会にも不登校の研究成果を取り入れようと努めている専門医の存在は恵まれた環境でもある。医学の目で支援しなければならない不登校の子どもがいるということである。
- ・オンラインを活用して、この3者が専門的な知識で連携し、年間500件の不登校に対するやり取りがあったと聞いており、今後の不登校や子どもの安心に繋げるために有効な活動である。
- ・美濃市では、医師との関係性が事業の進捗・強化に繋がっており、学校関係者以外の参入が大きな好影響に進展していると感じている。その主役である医師の知見と強力な想いやリーダーシップが基となっている感想であり、低予算での事業実施が実現されていると推測される。説明にもあったが、こうした事業を今後も継続させるためには、特定の医師のみならず、多くの関係者（行政・市民・教諭・SC・SSW）等の研修を通じて、理解が浸透・強化していかなければならず、今後の進捗が注目される取組であると感じるとともに興味を持った。
- ・表題に示された地元用語の「あんき」の意味である、「安心な事」「気楽な事」「気軽でのんきな様子」を体現された事業の方針が説明の中でよく感じられ、固いイメージなく不登校課題に取り組まれていると感じる。
- ・令和6年度「いじめ対策・不登校支援等推進事業」にスクールカウンセラー（SC）及びスクールソーシャルワーカー（SSW）を位置付け、特に、学校と医療をつなぐSCモデルを展開されていた。また、岐阜大学大学院医学系研究科小児科加藤善一郎教授（医師）を不登校アドバイザーに委嘱され、不登校児童生徒に対する支援に加え、



- 不登校の起きにくい学校づくりを進めていく仕組みや方途について調査研究を実施された。
- ・そのような中、SCによるカウンセリングの拡充及び医師によるカウンセリングは令和6年8月から令和7年3月となり、実質2学期からの対応となったことから、子どもや保護者教職員が必要なタイミングで相談できず、状況が悪化してからの相談となった事例もあったとのことであった。
 - ・また、SCの拡充については、拡充したとはいえ月1回程度の学校も多く、有効性を検証するためにはカウンセリング可能日数が少ないのも否めないことから、来年度は出来る限り早期からSC及び医師との相談ができる体制を整える方向である。
本市においても、SCやSSWの適切な配置により不登校の課題解決に取り組んでもらっている。ただ、残念ながら本市には大学はなく、美濃市のように大学との連携による取組は、不登校の保護者の皆さんの心理的安定にもつながる取組であると思っている。
 - ・今後は、医師と教職員、SCが情報共有を図ることができ、児童生徒や保護者の支援について相談できる仕組みが構築されていくことも不登校の課題解決には大きな枠組みになるのではないかと感じた。

〈視察を実施した効果等〉

- ・このような「学校・医師・スクールカウンセラー」の3者連携による不登校対策は、単に「学校へ戻す」ことを目的とするのではなく、子どもの心身の状態を総合的に支える体制づくりとして、大きな効果が期待できる。
- ・学校だけでは判断が難しいケースでも、医師やスクールカウンセラーが関わることで、専門的な視点から原因を整理し、早期対応につなげることができる。
子どもの安心感、心身の回復、学びの継続、家庭支援、社会とのつながりを重視した支援へ転換していくことが求められており、この3者連携は大きな効果を持つ施策であると考えられる。
- ・学校の活動に馴染めない、学校のやり方がマッチしていない子どもに対するアプローチとして、学校の制度を押し付けるのではなく、その子の特性に応じた対応をすることが全国どの学校においても一人一人の学びに有効であると思う。本市においても、「なんでこの子はみんなと同じことができないのだろう」と思われる子どもに対して、責める気持ちを持つのではなく、専門医の判断を仰ぐことで教職員がわも自信を持ってストレスなく対応できると期待される。今の学校制度にマッチしない子供が一定いることを、社会が認め、不登校は特別なことではなく起こりうるということが起こっているだけとの認識を改め、どの子もその子に合った学びを受けることができるように、美濃市の取組は大いに参考になるものであった。
- ・本市も、医療機関の関わりも含めた、仕組みづくりが必要ではないかと思った。
- ・特に専門医の協力を得て、児童生徒の不登校に対する課題の解決に繋げることは有効であり、国において力を入れていくべき見本であると思う。本市においても地元の医師に協力を求めていくことは可能ではないかと思われる。
- ・学校や教諭以外で、強力な想いをもちリーダーシップをとれる存在の大切さを羨ましく感じたところであり、舞鶴市もそうした人材の発掘や誘致を積極的に取り組んではと考える。
- ・不登校課題をセンシティブな印象で取組まず、陰から陽の事業展開に変革することが舞鶴市の最も大切な一步と考える。
- ・不登校の課題解決に取り組んでいくには、医師とSC、SSWの3者が情報共有をできる仕組み、児童生徒や保護者の支援についても相談できる仕組みをつくる重要性を理解した。

【愛知県小牧市】

〈視察に至る背景と目的〉

舞鶴市では令和5年度に「第3次舞鶴市教育振興大綱」を策定し、基本方針の一つとして「生きる力を育み子どもの夢をかなえる教育の推進」を掲げている。その中の目標である「個性を伸ばし夢をかなえるために必要となる力の育成」に向けて、ICTを効果的に活用し「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりに取り組んでいるところである。

小牧市では令和4年3月に策定した第2次小牧市学校教育ICT推進計画において、「時代を切り拓く子ども」の育成に力を入れている。その中で、児童生徒だけでなく、校務のデジタル化やペーパーレス化を進めることにより教職員の働きやすさの向上と教育活動の高度化を目指している。特に関係機関からの連絡や資料提供など従来紙面上で行っていたものの見直しやFAXや押印の廃止も含めた取組を実施されている。

児童生徒においては、端末の持ち帰りを日常化することにより、家庭での学習に活かすとともに、理論的に思考する力を育成するためのプログラミング教材として活用されている。

また、令和7年度にはICT教育パイオニア校として2校を指定され、遠隔での合同授業や交流学习などを試行検証されている。

このような先進的な取組を視察し、本市の学校教育におけるICTの利活用能力・資質の向上の参考とし、「生きる力を育み子どもの夢をかなえる教育の推進」に努めていきたいと考えている。

〈対応いただいた方〉

小牧市議会 事務局職員

小牧市教育委員会学校教育課 課長、指導主事、ICT教育推進係 係長

〈調査事項に関する説明の概要〉

〔視察項目〕

- 校務支援システムの導入による教員の働き方改革の推進について
- ICTに関する知識を有するICT支援員の配置や家庭へのICT機器の積極的な持ち帰りによる家庭学習での活用について
- ICT機器及びソフトウェア等の試行検証や授業実施によるノウハウの蓄積による教育現場でのDX（デジタルトランスフォーメーション）の推進について

〔概要〕

▽ 人口と世帯数等（令和8年6月1現在）

- (1) 人口：147,615人
- (2) 世帯数：71,603世帯
- (3) 面積：62.81km²

■校務DX(デジタルトランスフォーメーション)への経緯について

小牧市では校務支援システムを早期導入することにより、自宅から学校の職員室の校務用端末を安全に遠隔操作をできるシステムを導入し、教員の働き方改革を推進してきた。教員間では校務支援システムのグループウェアやクラウドサービスを活用し、伝達事項、各種資料及び教材をオンラインで共有している。また、校内研修をオンラインで実施、教員がいつでも研修内容を振り返られるようにアーカイブ視聴の環境を整備している。

しかし、各種デジタル化やオンライン化を進めてきたが、学校現場においては、依然として紙の資料が多く見られることも事実であるため、業務の円滑化・効率化の観点から各種デジタル化及びペーパーレス化を積極的に進める必要がある。

■校務系と教育活動で利用する学習系ネットワークの統合

今まで小牧市では、児童生徒の個人情報等を取り扱う「校務系」、メール送信などのインターネットに接続して行う「校務外部系」、児童生徒の教育活動に使用する「学習系」の3つのネットワークに分離し、児童生徒の個人情報にアクセスできない環境を構築していた。令和5年度からは1台のパソコンでそれぞれのネットワークを切り替えて利用できる新しい環境を構築している。より教職員の働きやすさの向上と教育活動の高度化を目指している。

■FAX及び押印の見直し

教育委員会から市役所関係部署だけでなく庁外の事業者などに対しても紙ベースでの資料配布依頼や押印やFAXを使用する資料提出などを見直すことを働きかけている。

■校務におけるRPA・生成AI等の利用

Microsoft365 PowerAutomateなどによる定常業務の自動化、生成AIを活用した校務の効率化を推進している。

■ICT支援員の配置について

授業支援やICT機器の活用促進支援、教員研修、先進事例やICT活用支援に関する助言などを行うICTに特化した支援員の配置を実施している。

■ICTに関するパイオニア校の指定について

ICTの利用の高まりに伴い、機器やネットワーク、ソフトウェア等に関する問題に対して、パイオニア校において日常的なICT活用を通じて原因を究明し、改善策・防止策を検討する。また、導入予定のICT機器等について、試用・検証を実施している。

〈委員の所感〉

- ・小牧市では、早くから校務支援システムを導入し、学校現場における業務効率化を進めている。

特に、自宅から学校の職員室にある校務用端末を安全に遠隔操作できるシステムを整備しており、教職員が場所にとらわれず業務を行える環境を構築している。

これにより、教員の働き方改革を推進し、長時間労働の軽減や業務負担の削減につなげている点が特徴的であった。

- ・1人1台端末を活用した学習環境整備

GIGAスクール構想による1人1台端末導入後は、授業支援ソフトウェアや学習eポータルを活用し、児童生徒への各種連絡や学習支援のデジタル化を推進している。オンライン上で教材や課題を共有することで、児童生徒が家庭でも継続して学習できる環境を整備していた。

また、情報共有の迅速化により、学校と児童生徒とのコミュニケーション向上にもつながっている。

- ・保護者連絡アプリの導入

令和3年度には、保護者連絡アプリを導入し、教員と保護者間の連絡をデジタル化している。欠席連絡や学校からのお知らせ等をオンライン化することで、保護者の利便性向上だけでなく、教員側の電話対応や事務作業の軽減にも大きく寄与していた。

- ・教職員間の情報共有のオンライン化

教職員間においては、校務支援システムのグループウェアやクラウドサービスを活用し、伝達事項、各種資料及び教材をオンラインで共有している。

これにより、紙資料の削減や情報共有の迅速化が進められており、必要な情報をいつでも確認できる環境が整備されていた。

また、校内研修についてもオンライン化を進めており、研修内容をアーカイブ化することで、教員が後から振り返り視聴できる体制を整備している。

時間や場所に制約されない研修体制は、教職員の資質向上にも有効であると感じた。

- ・校務DXチェックリストを活用した自己点検

小牧市では、文部科学省の「GIGAスクール構想の下での校務の情報化に関する専門会議」の提言や、「GIGAスクール構想の下での校務DX化チェックリスト」を活用し、自己点検を実施している。

- ・学校教職員の方々の働き方改革については、さまざまな取組がされているが、積極的にDX化を推進し、ICTが苦手な教職員には研修のフォローをされている。決して強制というわけではなく、紙の印刷物が好きな教職員には自由な選択肢を与えられている。また、不登校児童にはメタバースの導入が行われ、家から出られない子どもに社会とのつながりを持つ場を担保されている。土地柄、外国にルーツを持つ子供の割合が多いので、英字教科書など個に応じた支援をされている。遠隔教育として、遠いまちに住む子供たちとタブレットを用いて交流している。より安く、より安全にICTを活用する方法を模索され、積極的に活用に取り組んでおられることで、新たな時代の機器をうまく使いこなす努力をされていることを感じた。技術は使いこなすことで大変便利なものになると考える。小牧市の積極的な取り組みは未来都市への先駆者的な歩みとなると感じた。



- ・児童生徒だけでなく、校務のデジタル化やペーパーレス化を進める事により教職員の働きやすさの向上と、教育活動の高度化を目指されており、先駆的な取組から学ぶ点も多かった。しかし、小牧市学校教育ICTパイオニア校事業の推進にかかるアンケート結果報告書の自由記述のところでは、率直な意見もあり、たとえばタブレットのデメリットも書かれており、その点で私自身共感できるものであった。

- ・校務支援システム導入による教員の働き方改革の推進は、クラウドサービスを活用し、伝達事項、各種資料及び教材のオンライン化と共に教員の研修もオンライン化を実施している。しかし、依然として紙ベースの資料が多くみられ、積極的なデジタル化、ペーパーレス化を進める必要性を感じておられた。そのため、専門家会議の提言などを踏まえ、ゼトラストの構築、オンプレミス型から校務支援システムのクラウド化を進めている最中であつた。教育ダッシュボードについても活用方法を研究中であつた。

- ・ICT機器の積極的な持ち帰りで家庭学習の支援については、小学校で上昇していたものの、毎日持ち帰る率は28.5%、中学校では減少し、24%で、効果を高めるところには至っていなかった。

- ・パイオニア校の指定については、学校別テーマを設けICT活用を推進しており、持ち帰りも含めて、パイオニア校では取組の活発さがみられた。

- ・小牧市において、教育環境の充実や教諭の働き方改革に、ICTの活用が重要である位置づけが

十分に伝わる説明であった。ICT関連の担当者を教育委員会内に5名を配置し、急激に変化し続けるICT機器・システム等に対応され、社会変容に対応されている姿勢に感銘を受けた。

- ・機器やシステム等の進化に大変苦労されている現状も理解でき、最適なツールを選択する難しさや導入時期の判断・予算確保が今後も大きな課題であることが共有できた。生成AIやメタバースの活用も含め、最新機能を最適に活用するためには専門的に調査や研究する必要がある、小牧市にはその体制が整っている羨ましさを感じた。

- ・小牧市では、平成31年2月策定された「小牧市学校教育ICT推進計画」に基づきモデル校（現在のパイオニア校）を設置され、令和元年～令和3年にかけて、タブレットPCの授業実践、機器・ネットワーク・ソフトウェアの検証を実施に取組まれ、さらに、令和4年3月に策定された「第2次小牧市学校教育ICT推進計画」に基づき、「時代を切り拓く子ども」の育成に力を入れ取組んでこられている。そのような中、児童生徒だけでなく、校務のデジタル化やペーパーレス化を進めることで、教職員の働き方改革の向上と教育活動の高度化にも取組まれ、特に、関係機関からの連絡や資料提供など従来ペーパーで行っていたものの見直しや、FAXや押印の廃止も含めた取組も実施されている。
- ・児童生徒は、端末を持ち帰ることができ、家庭での学習に活かすとともに、理論的に思考する力を育成するためのプログラミング教材として活用されている。
また、令和7年度には、教育現場のDXを推進し、こどもたち自身が主体的にICTを活用して学びを深められるように、一人1台のタブレットの活用検証方針を具体的に示されていました。しかしながら、このような取組は本市においても実施されており、不登校の取組にどのように利用され、取り組んでおられるのかの確認には至らなかった。

〈視察を実施した効果等〉

- ・今回の視察を通じ、校務DX化は単なるデジタル化ではなく、「教員が子どもと向き合う時間を確保するための改革」であると感じた。
特に、（1）校務支援システムの活用（2）遠隔操作環境の整備（3）保護者連絡のデジタル化（4）クラウドによる情報共有（5）オンライン研修（6）ペーパーレス化を一体的に進めている点は大変参考となった。
今後、教育現場では教員不足や働き方改革への対応がますます求められる中、ICTを活用した校務DX化は不可欠である。
- ・本市においても、教職員の業務負担軽減と教育の質向上の両立を図るため、学校現場の実態を踏まえながら、計画的な校務DX化とペーパーレス化を推進していく必要があると感じた。
- ・特にメタバースに関しては、本市でも取り入れるべきである。全く学習をせずに社会とのつながりを絶って、引きこもっている人は児童生徒に限らず、大人でもいらっしゃると思う。メタバースで、これまで取り組まなかった学習を少しずつでも始め、社会との接点も少しずつ構築していくことで、自分の殻に閉じこもっていた状態から、少し抜け出るきっかけになるのではないかと期待する。また、居場所は複数持つことが理想であると考えことから、リアルな世界とネット上の社会と、他にも自分が居心地良く感じられる場所を見つけて欲しいと思う。ネットの中で、動物を育てたり、植物を育てたりという体験も有意義であると考え。ネットリテラシーに関する研修も先生方に受講していただきたい。
- ・取り組まれたアンケートについては、非常に参考になるものが多かった。実際、児童生徒や教職員の声に耳を傾ける中での進め方、取組方が重要であると感じた。
- ・校務支援は働き方改革にとって重要であるが、効果を高めるには、よく現場の状況を踏まえる必要があることが学べた。タブレット端末の家庭学習の利用は、タブレットが重たいため、特に小学生には持ち運びの負担がある。パイオニア校の取組は、各学校に分けて実証的に行い、積極的なデジタルの活用が期待できる。
- ・舞鶴市に確認しなければならないが、ICT環境の急激な進化に対応できる体制が取れているのか不安であるが、難しいようであれば先進的な自治体の調査や監視を強化し、最適なツールの更新を素早く行うほうが得策ではないかと感じる。



- ・小牧小学校は、小牧市のICTに関するパイオニア校の指定を受け、テーマとして特別支援教育におけるICTの活用について、ICTを「学びの道具」と位置づけ、より効果的な活用方法の参考情報等、機器やソフトウェア等に発生する問題や課題についての改善策・防止策に取り組まれており、本市の取組は小牧市のICTの導入内容よりも進んだ取組がされていると思う。

【長野県長野市】

〈視察に至る背景と目的〉

舞鶴市では令和6年度の中学生における不登校出現率が全国平均値より高い状況にあるため、不登校となり様々な体験ができる学びの場が奪われることがないような教育環境づくりが急務となっている。

長野市では、不登校対策として多様な学びの場の提供に力をいれている。市内8カ所の教育支援センターや校内教育支援センターを設置しており、教育支援センターの1つであるSaSaLANDでは、信州大学教育学部の協力の元、メタバース(仮想空間)上に、自宅にしながらオンラインで子どもたちの居場所を作成し、コミュニケーションの機会を提供している。

長期に渡って欠席をしている児童生徒に対し、アウトリーチコーディネーターを中心としたスタッフが家庭に訪問し、児童の学習のサポートや生活リズムの改善などの支援をされておられます。不登校児童生徒を持つ保護者に対しても孤独感の軽減のためカウンセラーなどとの個別相談や語り場の提供など幅広い支援を実施している。

また、不登校の児童生徒が民間のフリースクール等を利用した際の負担金を助成する取組が行われている。

こうした取組を通じて、舞鶴市における不登校児童生徒への対策(アイデア)の参考とさせていただき、児童生徒の学びの場の創設を行いたい。

〈対応いただいた方〉

長野市議会 課長、事務局職員

長野市教育委員会学校教育課 課長、係長

〈調査事項に関する説明の概要〉

〔視察項目〕

- 市内における教育支援センター及びSaSaLANDの設置とその効果について
- 長期に渡って欠席をしている児童生徒へのアウトリーチコーディネーターを中心とした支援について
- 児童生徒がフリースクール等民間施設を利用するために負担した費用に対する助成事業について

〔概要〕

▽ 人口と世帯数等（令和8年4月1日現在）

- (1) 人口：357,781人
- (2) 世帯数：165,969世帯
- (3) 面積：834.81km²

■長野市の登校支援・多様な学び推進の取り組みについて

長野市では「つながる」をキーワードにした不登校児童生徒対策を実施している。子どもが安心を実感できる学びの場につなぎ、社会的に自立していくことを支援していくことを目指している。特に校内支援センターや教育支援センターの支援の充実に力を入れている。

■教育支援センターSaSaLANDについて

SaSaLANDは長野市内にある教育支援センターの1つであり、子どもたちが安心を実感できる居場所となることをコンセプトとしている。本施設では、子どもたちの社会的自立に向けた支援としてメタバースによるオンライン活動やスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家の保護者への支援も手厚く行っている。特にメタバース(マインクラフト)上で自宅にしながら人との関わりが持てることはその後の本施設への利用に繋がるなど特筆すべきことである。他にも信州大学教育学部と関連したイベントや学生をSaSaフレンドとして一緒に遊んだり、話したりする活動なども行っている。

■アウトリーチ支援事業「つながるサポート」について

長期に渡って欠席し、自宅で過ごす児童生徒に自宅への訪問や面談を行い、支援計画を立てるアウトリーチ支援を実施している。本事業ではアウトリーチコーディネーターを中心としたスタッフが家庭に訪問し、子どもの心理的安定や学習の遅れの解消の支援を行っている。このアウトリーチ支援とSaSaLANDの利用により、実際に学校に行くことができるようになった子どもの事例もある。

〈委員の所感〉

- ・「SaSaLAND」を中核とした教育支援センターの充実

長野市では、信州大学とも連携をし、教育支援センター「SaSaLAND」を中心に据え、不登校児童生徒一人ひとりに応じた支援体制を構築している。

特徴としては、単に「学校復帰」を目的とするのではなく、子どもの希望を取り入れ安心できる居場所づくりを重視している点である。

また、教育支援センター全体で子どもたちを支援する考え方が徹底されており、個別支援だけでなく、子ども同士のつながりや自己肯定感の向上にも力を入れていた。

- ・メタバースを活用した支援

外出や登校に強い不安を抱える子どもに対し、メタバース空間を活用した支援を実施している。

オンライン上で他者と交流しながら学習や相談ができる環境を整備することで、家から出ることが難しい子どもにも「社会との接点」を維持できる仕組みとなっていた。

特に、教育支援センターやアウトリーチ支援と連動させることで、オンラインだけで終わらず、「SaSaLAND」利用につなげている点が大変参考となった。

- ・保護者支援の充実

不登校支援においては、子ども本人だけでなく、保護者への支援も重要視されていた。

保護者同士の交流や相談機会を設けることで、孤立感の軽減や情報共有につなげており、「家庭を支える視点」が強く感じられた。

不登校は家庭だけで抱え込む問題ではなく、地域全体で支えるべき課題であるとの認識が共有されていた。

- ・フリースクール等民間施設との連携

長野市では、フリースクール等民間施設との連携を積極的に進めている。

「長野地域多様な学びフォーラム」の開催や、「居場所冊子」の提供により、保護者や子どもが多様な選択肢を知ることができる環境づくりを行っていた。

- ・フリースクール利用料助成事業

長野市では、フリースクールへ通う子どもたちに対し、利用料の一部助成を実施している。

不登校支援において、経済的負担が家庭に重くのしかかるケースも多い中、行政が支援を行うことで、子どもの学びの選択肢を広げている。

経済的理由によって支援につなげられない子どもを減らす視点は、今後重要性が増していくと感じた。

- ・多様な学びの場における出席・評価の推進

長野市では、学校外での学びについても、一定条件のもとで出席扱いや評価につなげる取り組みを進めている。

「長野市ガイドライン」の適用や、研修会の実施によって、学校現場の理解促進にも取り組んでいた。

- ・アウトリーチ支援事業「つながるサポート」

長野市では、家庭訪問等を通じて子どもや家庭に直接関わるアウトリーチ支援事業「つながるサポート」を実施している。

支援につながりにくい子どもに対して、待つ支援ではなく、「こちらからつながりに行く支援」を行っている点が特徴的であった。

また、メタバースや教育支援センター等の支援と連動することで、段階的な社会参加につなげている点も大変参考となった。

- ・不登校児童生徒の居場所づくり

SaSaLANDについて説明を受けたが、勉強を教えないという方針に驚いた（子どもが希望すればドリルなどを行う）。

SaSaLANDは子どもの回復の場所であるという定義が興味深かった。SaSaLANDに行けば、優しいスタッフがいて、好きなことをして過ごすことができる、楽しいから行きたくなる、そして自らの意思で学校に行き始める子どもたちが出てくる。学校に登校することをゴールとはしていないが、結果的に学校に戻る子どもがいるというのは大変興味深い。

また、大学があり、そこで児童心理学などを学んでいる学生や院生が、自らの実習も兼ねてスタッフとしてボランティアに来てくれることは、子どもにとって大変いいことであり、大学のない本市としては羨ましく感じる。

- ・美濃市では、不登校児童生徒を医学的見地から対応し、小牧市ではDXを用いて支援し、長野市では回復期として回復するための場所を作る、とそれぞれの市の不登校児童生徒に対する



アプローチの違う方法に興味深く感じた。

- ・教育支援センター「SaSaLAND」は説明を聞いているだけで、子どもの生き生きした姿が目に見えようだった。子どもや保護者に寄り添っておられる担当者の方の熱意も伝わってきた。本市においても、あのような教育支援センターがたくさんあれば、とうらやましくも思った。現場の見学ができなかったのが残念だった。
- ・自治体の規模は違うが、市内8か所の教育支援センターの設置はうらやましい。信州大学との連携もよいと思った。
- ・教育支援センターSaSaLANDは、子どもや保護者の意見と専門家などの声を聞き、あらゆる手を尽くして、子どもたちが安心して、興味を持ち訪れることの出来るセンターとして作られ、イベントも含めスタッフの大変な努力がうかがえた。子どもたちの改善と自立、また学校への復帰もみられると共に、保護者からの感謝の声も大変多い。
- ・アウトリーチ支援は効果が高く、大学生も含めたスタッフも多く存在していた。
- ・「SaSaLAND」の良さを充分に感じるとともに、不登校生徒児童の拠り所と学習支援の強化をしっかりと割り切り、各センターの役割を発揮されていることに感心した。SaSaLANDの施設的良好さだけでなく、運営方針の方向性、スタッフ（大人）の関わり方も素晴らしく、報道や視察受入も含めオープンで事業に取り組まれており、陰ではなく陽の事業に驚き感心する。
- ・何より驚きは、子ども支援としてではなく、また委託事業としてではなく、教育委員会の所管として取組まれている姿勢が素晴らしく感じる。どうしても関係機関との連携で対応しがちの事業を、教育委員会直轄で行うことで教育全体の一部として取り組まれており、市民や当事者に対して市の熱い思いを直に感じることができると考える。
- ・説明の中に、「何がきっかけで回復するかは分からず様々である」の言葉に、わがまちトークで頂いた意見と関連することができる。「何がきっかけで不登校になったのかは分からず様々である」とわがまちトークで意見交換をしたが、回復も同様であることは議論をしなかったのが事実であり、そうした観点を私も含め忘れて議論しているように気付いた。大人は課題に対し理由付けを求めがちだが、理屈云々だけでなく現実を受け入れ、見守るだけでなく当事者に共感することが重要であるのではないかと感じた。
- ・長野市は、不登校児童生徒が増加していく中、文部科学省の令和元年10月25日付けの通知「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」の通知について、改めて国の方針を踏まえ、1「令和元年度10月25日付け通知について」、2「学校教育の意義及び在り方について」3「不登校の児童生徒や保護者への支援等について」まとめられ、各学校で基本的に取り組むべき不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方を各小中学校へ通知され、教職員への周知の徹底を図られていた。
- ・市内7地区に教育支援センターを設置、それぞれの課題の把握及び要因の解決に取り組まれていたが、施設の老朽化や、狭く活動や新たな受け入れに制約があり、利用を希望する児童生徒の要望に応えられない状況が続いた。
そこで、廃校を改修され令和4年度に「つながる」をキーワードに「子どもたちが安心を実感できる居場所多様な学びの場として、3つの支援の柱、1「子どもたちの社会的自立に向けた支援」2「保護者への支援」3「教職員の不登校に係わる研修」の教育支援センター「SaSaLAND（職員20名）」を開設され、長野市校児童生徒支援体制を構築、現在は20名の職員で運営されていた。
- ・信州大学と連携によるイベントやメタバースによるオンラインの支援等も展開され、増加する不登校児童の社会的自立に向けた支援等に取り組まれ成果を挙げられている。
- ・本市においても、長野市のような子どもや保護者の活動の様子や声を共有し、運営を協議していく組織、大学（心理・特別教育支援・ICT・野外教育）や地区住民自治会協議会、行政機関などが参加する運営協議会で教育支援センターを支えていくという仕組みづくりも、今後必要になってくるのではないかと感じた。

〈視察を実施した効果等〉

- ・今回の視察を通じ、不登校支援においては、「学校復帰のみ」を目的とするのではなく、子ども一人ひとりに応じた多様な学びと居場所を保障する視点が重要であると強く感じた。不登校児童生徒数が全国的に増加する中、行政・学校・家庭・地域・民間施設が連携し、「誰一人取り残さない支援体制」を構築していく必要がある。
- ・本市においても、子どもたちが安心して学び、自分らしく成長できる多様な居場所づくりと支援体制の充実について、今後さらに検討していく必要があると感じた。

- ・長野市が取り組む「心の回復期の居場所」というアプローチは、子どもが主体的に学びを取り戻すプロセスとして、本市でもぜひ取り入れるべき視点である。
私たちがパラダイムシフト（認識の転換）すべきなのは、学校や勉強の捉え方である。学校は「義務の場所」ではなく、勉強は「自分を幸せにするための手段」と考える。したがって、登校すること自体が子どもの心を壊しているのであれば、それは本末転倒と言わざるを得ない。

重要なのは「まず心を守ること」、そして「将来のために自分のペースで学ぶこと」。学びが「他者との競争」から「自己の成長」へと変われば、成績の順位で一喜一憂することはなくなる。ましてや、順位が低い生徒をバカにしたり、叱責したりすることは、子どもの自己肯定感を奪うだけであり、教育が目指すべき「子どもの幸せ」とは真逆の行為である。長野市の視察で個人の学びについて認識を新たにすることができ、本市でもぜひ取り入れていただきたい考え方であると感じた。

- ・本市においても、教育支援センターの増設が求められていると思う。機会があれば、実際現地を見学させていただき、いつになるかわからない、教育支援センターの増設に期待したい。

- ・以前は設立が想像できなかった、SaSaLANDのような、多様な子どもに対応する施設が設置されたことは、子どもや家族を含め、多くの人に安心感を与えることが出来ていると感じる。本市を含め多くの自治体に設置されることが理想的である。
- ・アウトリーチによる支援は、現行の不登校に対する施策の中で、最も効果が高いことを改めて実感した。課題はスタッフの確保と持続性にあるのではないかなと思う。



- ・大変気付きの多い視察であり、不登校課題の取組を「陰ではなく陽の事業」として実施するとが舞鶴市に求められる。新たな施設の設置は費用面で大きな課題があることも事実であるが、運営方針やスタッフの意識改革は可能であるため、同じような事業を教育委員会には求めていきたい。
- ・所感にも記載したが、頭で考えすぎる大人を改め、当事者意識で課題解決に向けた取り組み方に、教育委員会も私たち委員会も意識を変革する必要があると考える。
- ・子どもたちが安心を実感できる居場づくりには、子ども達の社会的自立に向けた支援、保護者への支援、教職員等の不登校に係わる研修などが総合的に取り組める仕組の構築が重要であると感じた。

〈視察を通して〉

いずれの市の取組も、本市議会の取組の参考となる部分があり、委員からも本市議会で取り入れるべきとの所感が寄せられていることから、今後、本委員会において議論していくこととしたい。

また、本年の重点事項について、引き続き所管する委員会として注視し、より効果的な施策となるよう、市への政策提言に向けた議論を重ねていくこととする。

《参考：本年の重点事項》

- ・夢に向かって将来を切り拓く子どもを育成するための環境づくりに関する調査・研究
 - (1) 確かな学力の育成
 - (2) 児童生徒の不登校への対策